

学校文法と記述文法・説明文法

田中 実

1. 大学一年生の英語関係の最初の授業や、高校・予備校・塾に招かれて「大学入試に合格する英語の勉強法」といったテーマで講演するとき、学校文法と記述文法・説明文法の違いを例をあげて話すと興味をもってきいてくれる。

大学での授業を例にとろう。英文学科や英語学科の学生ならいざしらず、そうでないのに、なぜ、いわゆる教養科目としての「英語」の単位をとる必要があるのか、英語がそれほど好きではないから、例えば、日本文学科に入学したのに...と不平・不満をもつ学生も少なくない。

そんなときに、「いまはグローバル化の時代だから英語ぐらいはなにを専攻しようかと学ばねばならない」とか「どんな専攻でも英語で書かれた文献を解説しなければならぬので英語は必要だ」などと学生に言ってもいまひとつ説得力がない。

それよりは、開口一番、「大学入学までの『英語』と「大学で学ぶ『英語』」とは違うんだよ」、とちょっと大げさに言うと学生の目は輝く。下世話な言い方だが、「大学で学ぶ英語は高校の英語に毛の生えた英語ではない」と言うと、さらに学生の目は輝く。

2. 「たぶん皆さんのなかには、『チャート式ラーナーズ高校英語』を使って英語を勉強してきた人もいるでしょう。もし、よかったら、使った人、手をあげてみて」と言うと、各クラスに数人はいる。ありがたいことに、北は北海道から南は沖縄まで、日本全国でご好評いただいている参考書だから。

それはともかく、「でもね、『チャート式ラーナーズ高校英語』をはじめとする参考書には書けないこともあるんだよ。なぜか、わかる？高校英語の内容は、文部科学省の「学習指導要領」に則ったものでないといけないからね」と言って、「大学入学までの英語」=学校文法に基づく英語と、「大学での英語」=記述文法・説明文法に基づく英語の違いの具体例

を示すのである。

例えば、「AはBとは違う」という文は、

A is different from B.

で、学校文法というのは規範文法とも言うくらいだから、規則づくめで、この場合、「前置詞はfromであってfrom以外のなにものでもないよね」と学生に投げかける。

「でもね、英語のネイティブ・スピーカーのなかには、

A is different than B.

A is different to B.

を好んで使う人もいるから、大学に入った以上、規則ばかりにとらわれないで、『あるがままに』ものごとを受け入れる記述文法の観点に立って、fromでもthanでもtoでもいいのだ、という立場をとろうよ」とたたみかける。

さらに、「あるがままにものごとを受け入れるのはいいけど、『なぜ』, fromなの、『なぜ』, thanなの, toなの、と問いかけてみないか」と付け加える。

すると、もう学生の目は、ランランと、コウコウと輝き続ける(!?)。

3. 「『AとBとは違う』って言うとき、fromを使うのは『AはBからはなれている、だから、AとBは違う』って発想なので、fromだね。thanを使うのは『AとBとを比較すると、AとBは違う』から、toを使うのは、

A is indifferent to B.

という『AはBに無関心だ』のときのtoを、まあ、いいかげんに『AはBとは違う』にも適用したんだね。differentとindifferentは似ているから」と説明すれば、学生は説明文法の観点に立った英語を学ぶことになる。

そして、さらに、たたみかけるように、「fromは英米で使われるけれど、thanは主にアメリカ英語

のくだけた言い方で、toはイギリス英語でよく使われるんだよね」と言うておく。

しかし、これで終ってはいけない。「コーパスって、知ってるかな。実際に書かれたり話されたりした英文を集めたもので、パソコンで検索できるんだ。コーパスもいろいろあるけど、BNCというコーパスによると、書き言葉では90%近くがfromだけど、話し言葉ではfromは50%、toが40%、thanが5%弱、使われているんだ」と、まあ、ここまで言うて、学生はもう完全に陶醉状態(?)になって、こちらの話が続くのを待っててくれる(?)。

ちなみに、ご承知のように、最近の英和辞書はBNCやその他の大規模コーパスでの検索結果を取り入れた記述がなされているが、そのなかでも、推奨したいのが『ユースプログレッシブ英和辞典』(小学館)である。筆者が編集委員の一人として関わっているもので。

4. 学校文法と記述文法・説明文法の違いを知ってもらうために、これもよくひきあいに出すのが、「英作文」である。高校生であろうが、大学生であろうが、英語を書くということに対する苦手意識をもっている人は多い。その理由はいろいろあるが、それはともかく、学校文法のレベルにおいて英語を「書く」という場合と、記述文法・説明文法のレベルにおいて英語を「書く」という場合の違いを大学一年生の最初の英語のクラスなどで話すと、これもまた、大変興味をもってきいてくれる。

「『このスープはかなり熱い』っていう日本語を英語で表現してみよう」と言うて、口頭で言うてもらったり、黒板に書いてもらったりすると、

This soup is very hot.

This soup is too hot.

が圧倒的に多い。つまり、「かなり」に対してvery, tooといった副詞を用いるのである。

そこで、「学校文法を習得した高校生が、大学入試の英作文で上のよう書いたなら、10点満点であれば10点さしあげます」と言う。続けて、「でもさあ、very = 「非常に」だし、too = 「～すぎる」だし、「かなり」とはちょっとニュアンスが違うんじゃないの」と言う。入試のときに、一部の大学は除き、和英辞典をひくわけにはいかないが、大学の授業で和英辞典をひけば、「かなり」= fairly, rather,

quite, prettyなどの副詞が見かけられる。そこで、「『かなり』に対してそういった副詞があるなら、あるがままに受け入れて、すなわち、記述文法の観点に立って、それを使おうよ」とすすめる。すると、例えば、

This soup is fairly hot.

This soup is rather hot.

と言ったりすることができるわけである。

でも、ここで終ってはいけない。もし、レストランで同じスープを口にした、英語のネイティブ・スピーカーのうちの一人はfairlyを、もう一人はratherを使ったとしたらどうか、という問いかけをしなければならぬ。

ここからが、説明を要する、説明文法の域に入っていくことになる。「皆さんのなかにも、スープの熱いのが好きな人もいれば、猫舌で、ちょっとでも熱いのは苦手、という人もいるでしょう。そこなんだよね。スープをひと口、口にするなり、『このスープ、かなり熱い。熱くておいしい』という場合は、fairlyなんだ。でも、スープをひと口、口にするなり、『このスープ、かなり熱い。熱くてとても飲めたものじゃない』と言う場合は、rather。つまり、普通、fairlyは好ましいニュアンスを、ratherは好ましくないニュアンスを表すわけ。」

もう、ここまでくると、学生の目は上述のように、ランラン、コウコウと輝く(!?)。さらに、輝かせようと、いい歳をこいた教師は、汗だくになって、次のように言う。

「英米で若干の違いはあるけれど、fairly, quite, rather, prettyでは、fairly < quite < rather, pretty < veryといった順で、fairlyはそんなに程度は高くないんだ。スープなんでものは、種類によるけど、あんまり熱いとおいしくなくて、いわゆる人肌程度がいいんだね。だから、それほど程度の高くないfairlyを用いて、This soup is fairly hot.と例えば、いい熱さ加減で、おいしい、となるわけ」と。

5. 以上、学校文法と記述文法・説明文法に基づく英語への興味づけの方法は、万全とまではいかないが、確実に学生に目をランラン、コウコウと輝かせて(!?)もらえる方法だと思っただが、いかがだろうか。

(関西学院大学教授)